

女學校
用讀本

源氏物語拔萃

卷之八

八



花宴

は巻源の年立湖月
紅茶宴の次の年の春
之、源氏十九、宰相中
將正三位也とある、
例の玉小櫛の説は陸
て、二十歳と改め、

段落

は巻八、一大段三小段
と、一、小段は於てハ
南殿の極の宴のあり
さ、源氏臘月夜の文
よ違ふことを叙し、
二、小段は於てハ源氏
大庭よて遊ひのつよ、
弁中ねのくまありあ
ひて、高欄よりありて、
物の音ありせり、あ状
を叙し、三、小段は右大
玉家の弓結の日記

花宴の卷

凡一大段三小段十二節

は巻八、源氏二十歳の春のこと。卷の名ハ、詞を
て付たり。冒頭よなんでんの極の宴せさせ給ふとある。
後世ハ花といハば極のよとくられ給ふ。極のえんを花
のえんといひ、うへーよや。花鳥よ。例を以て名とせむ。
但巻の例よハ、南殿の極ハ宴せさせのよとありて、
奥の二条の極とて、此處の宴のよハ、花の花ハ宴
のよとあり、は、そよつきて巻の名を花の花ハ宴とい
へる。よやと受侍せ給ふ。古集花ハ宴とて、極を執事
をいひるらる。一、侍らる。是ハ禁中ノ事也。可れを
私の家ハ宴るれを。後南殿の極ハ宴をめて名目と
せり。と心ゆ。ききなりとあり。又細流よハ、唐土よハ
花といハば牡丹。日本よハ花といハば桜也。極の宴。花
の宴差別ある。ごうくはとん色。小櫛の説のめく。此
を此極の宴のよを。須磨。落き。をよめ。の巻をよと
ハ。まをらち花ハ宴とて、えん。按るよ。新秋よ。極
花をたぐ。花とて、ごうりハ古へをいそ。とて。古今集
よ。何よもあ。極花とある。をいそ。れたれど。
古今の比ハ尤もあ。は式部の比ハをや花と



源氏物語

花のえん

ゆふと」とある所の
兼、又御月夜のその
まよ引きり月の夜ま
まに者とあるは皆眼
目をさして「小段の
才二節」も「小段の
をひかりよ」のまよ
とあるは此の全篇
の眼目をさす。

服應

はぎの服はまが「小
段の才一節」も「ま
まよ」とありて才二
節「まが」も「まよ
みやらび」も「まよ
ま」のまよのまよ
たるは思ふ又因ふ
の着るのまよは「ま
まよのまよのまよま

○冒於之。まがは後松の宴せきよのまよは「まよ
まよ」まよのまよのまよ。○二月二十余日。○「まよ」
南殿は北震殿のまよ。○「南殿のまよ」まよのまよ
○「まよ」南殿のまよ。○「まよ」まよのまよ。○
○「まよ」まよのまよ。○「まよ」まよのまよ。○
○「まよ」まよのまよ。○「まよ」まよのまよ。○
○「まよ」まよのまよ。○「まよ」まよのまよ。○

日とよくとをれて。まよのまよ。まよのまよ。
ふちよげまよ。みまよ。まよのまよ。上達部

まよ。まよのまよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。まよのまよ。

「まよ」とあるは、おま
のまよは「まよ」まよ
おまよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。
まよ。まよのまよ。まよのまよ。

小ノ才二節

まよのまよのまよ

ならびにおまよのまよのまよのまよのまよのまよ
づあて。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
たり。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
まよ。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
まよ。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
まよ。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
まよ。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
まよ。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
まよ。まよのまよのまよのまよのまよのまよ
まよ。まよのまよのまよのまよのまよのまよ

樂の上手をえらび
 のひーえ○やう
 俗ダシくニえ○れ
 のうくひをさつづ
 春鶯囀へ又天長宝壽
 樂ともしふ樂の名
 ○源氏の内お系乃
 実の字はかやう
 用あるは當時のつ
 ひさまよて源氏の
 お系の内かといふ
 さに以下おれ○ま
 まらざーたまませ
 あざー花を冠
 さびをいふまおは朱
 雀院へ源の舞を切
 りよ不望のま○
 袖うへに舞ひの袖
 を離れ○ひとを
 一折へひとまひ

やし〜^帝屋つれて。まらるれたるもあられよ。
 さあ〜^帝はらんぞもをを〜かりける
 一小段の才一節。南廬の梅の宴よ。人々詩を賦し。
 文をけり。才をあらそひ扱え。さや文中よおの
 づう源氏秀才なるさやめせり。○その
 乃の文の道。文才よたがさる。くさる。○た
 ん探韻。韻字のうち一字をさぐりゆて。さ韻よ
 詩を賦し。○さあやうちやうさやうさやうさやう
 卜春ハ真の韻。韻字を探めて各さ〜。さやうさやう
 何くの字をさるとさる。勅より探るゆ急。○
 人のめうつ〜。たごるらび。次は源中おれささ
 はおとりのめうつ〜。めうつ〜。目移。人々才一は源目
 を付て。次は目を移して源中おれさる。○ゆめやま
 心よ〜。おれ〜。源中おれさる。○さやうさやう
 ありひ。○め〜。俗モットモラシク。○さのん
 源氏中おれの外のん。○さやうさやうさやう
 さめうはよんや。俗よ一座あらけてさる。○さ
 ふ。あらけとおれ〜。さやうさやうさやうさやう

ちどいふよおれ
 考書喟の樂ハ大曲
 よて昔ハ十四事あれ
 バ末の一疊を舞ひ
 ひ〜。やまおせ
 めつゝ舞のさ
 ○うらめ〜。さ
 左大五郎ハ葵上と
 源との内中のむつま
 ーうらめをつま
 恨〜。さやうさやう
 さをれて感涙をな
 げ〜。さやうさやう
 おそ〜。さやうさやう
 の契の時源の相さる
 れバ何とおをささ
 と勅語ある。○さ
 う〜。さやうさやう
 今ハ断絶〜。さ
 りれハ今〜。さ

文才の乃よ貴き人。○さやうさやうさやう
 時の進退ハ容易なる〜。さやうさやう
 う〜。昔〜。げさる。さやうさやう
 ○さやうさやう。老人の博士。さやう
 ことよ〜。さやうさやう。さやうさやう
 さる。表を〜。さやうさやう。さやうさやう
 なま〜。あら〜。さやうさやう。さやうさやう
 ー。さやうさやう。さやうさやう。さやうさやう
 ひよ〜。さやうさやう。さやうさやう。さやうさやう
 する。源氏の法。さやうさやう。さやうさやう
 られて。さやうさやう。さやうさやう。さやうさやう
 めの。さやうさやう。さやうさやう。さやうさやう
 の。さやうさやう。さやうさやう。さやうさやう

ちまぐりて源氏を
会源は舞の文うち
まぐり時刻を違す
録をのふ天子より
ほ夜を申おのふ
○いよけちめえ
び夜を入りて格別
よあもん色ぬ
○おのりさどかう
るよの詩の披露
下前よきて文人
階下よ進て講頌
るいよあり○く
まぎりのくち毎句
秀逸なるが講師
感ののく○ま
まの女はれまら
くよ何とてかあり

り中ひめくまよ。似づまのたなくはゆ左の
おと。うらめ。まもはねて。後おと。ぬふ。
院中おしづらおそ。とあれバ。柳。花。苑。
とらふ舞を。これの今ま。うちまぐりて。
かほよめや。とるづのひやまけん。と面白けれど。
ほぞのりりて。とめづら。まよ。人おめ。と。
うん。づちめ。れ。ま。ねてまひる。と。ねよ入
て。とよけちめえ色。ま。ま。ど。わう。ま。
ま。源氏。の。ま。は。ま。を。か。う。か。え。よ。み。や。ら
び。く。ま。ま。の。い。ま。の。ま。の。せ。ま。れ。ら。よ。

廿二号二

めでたき源氏を
徹ぬいよみみ
とあやみみ
目のかう思ふも
るんよまがやう
思ふも
大のよのま
姿ハ源をいん
まつづらな
通りの関係
よて源の
又乎まやう
ほよもこ
マシヤウカイ
おのれいせ
まハるの縁
あといひま
縁後よて
ふなり○周
うちをけん

い。ま。ま。あ。う。か。う。や。う。れ。を。ま。ま。ま。
このまをひありま。の。ま。の。ま。の。ま。の。ま。
おろのまおぼま。ん。中ま。め。れ。と。ま。ま。ま。
けてま。ま。れ。女。師。れ。あ。ま。が。ち。に。ま。ま。ま。
ん。も。あ。や。う。の。ま。か。う。思。ふ。も。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
大のまよまのまま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
んのおおれま。ま。ま。の。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
花宴。一。小。段。の。身。二。節。也。高。白。花。夕。乃。乃
花。乃。え。ん。院。中。お。柳。花。苑。を。舞。ひ。の。ま。ま。

源氏物語

花乃えん

かやうのふい後のみ
こころけうちよ思
ひのふらならんをい
あでもれならん
とそ子地より疑ひ
ていへる

一ノ才三節

月いとあつらひ廿五日
なればあて月の物
え〇尺長く〜あつ
く月のよきけ〜まを
えきてあつらひ〇
うへのんじ屋上はあ
のんじ〇あつらひ
べきと〜ち王命ぬ
が局れものいひ入戸
口〇あつらひ〜し休
まよ〜るんげま
よていあらぬ〜え
俗キガスマナクテあど

叙せり。はふの大うこのふのまぎ〜をみ中〜このはとある
後のふい。おまゝの巻。一小段の才二節は後にはおほ
けるま〜ころたこの〜ま〜のが。ま〜してめを〜く〜え
ま〜とおぼは〜とある文脈をうけたるよて。照るなり。
上を中あ〜あ〜れ後ま〜く〜らせま
ひぬれば。の〜や。うよた〜ぬるよ。月いとあつら
さし〜を〜ま〜源氏のまゝひんちよ。え
ま〜が〜おぼはのひけま。うへのんじ
もうちやま〜。あやうよおひひうけぬ
ほ〜ま。あ〜お〜ひまらやあま。と
あつらひ〜を。〜を。う思ひてうあ
がひありけど。う〜らふ〜きと〜ちま

廿二号三

いすよおれ〜〇三の
くち旧注云ほそどの
〜あよ戸三あり
南の才三よあ〜ま
〜た〜戸〇
〜と〜樞戸〇
かやう〜ま〜かや
うの油断より男女の
〜あまのものをと
〜付の〜から源の
のぞき〜の〜柳を
よ〜お〜人付ら
れの〜伏業〜〇おほ
ろ月よ〜引か〜新
古今よ〜りもせび
〜りも〜ぬまの夜
の御月よ〜ま〜の
ぞ〜い〜を
ゆのぞ〜といひ
あ〜い〜を吟

源氏物語

してけぬを。うちをなげきて。るほあら〜よ。
弘徽殿のほそどのまよよりぬれば。三の
くち阿ま〜た女師を〜の所つぼぬ。や
あてまうのぼりひひよけま。人〜ま〜
るけをひるり。お〜の〜〜とめあま
人お〜もせび。あやうよ〜世の中れあやま
ちあま〜と。とおひひてやをらのぼり
ておぞま〜人。ハ〜なぬた〜。いと
このうを〜げなる〜急の。た〜ての人
とはま〜ぬおぼろ月。夜よ〜る物ぞな

花乃えん

いたるこ○ひをたそ
 見ハ誰ぞん○ひのま
 よのあ「女の朧月夜
 りと吟じたるをう
 けておぼろけといふ
 へ又入月といふハ上
 月といふあろうさし
 ぬとある首尾な
 れど入月のさやのさ
 めにおぼろけなら
 ぬといふよせんとさ
 ハ深衣よかく思ひも
 かけびあひえんお
 ぼろけならぬちぎ
 りよていなきこと
 へおぼろけならぬハ
 俗ナミタイテイテナイ
 とのまこと○まろハ
 こなるよゆもされた
 れを旧注も源氏の

き。とうちぢぢして。こもこぢぢよんぬの
 の。源氏うれくして。ふと袖をとくもまふ。
 女おそろしとおのけしきよめて。あな
オソシロシむくつけ。こをたそ。このまこと。たすこの
 うとまきとて。
源あきね乃表を志すか入月のおぼろけ
 ならぬ契とぞ思ふ。とそやをらいつきおろし
 て。いお押開。そはキモガツブレ。まよあまこれ
アイソラシクるさ海いとちい。うをひげあり。こなる
ウツクシくくくよ人のとのぬどまろハこなるよゆ
源

廿二号四

自称よをあらびん
 よゆ。されたまを
 とハ時よとりて計
 略よのぬよ○なき
 けなくこむ。無情ニ剛々シク女
 の用を○福をく
 ぬゆけび上の才ニ
 草又ねいさうふけて
 とある思慮○心あ
 たら。心は周章を
 るん○すほるのりあ
 らハ狩といふ初味あ
 り先刻より名のりあ
 へといふどるのらがる
 ゆ急ふ今まこせめ
 のふさま。なほと
 いふ初よ。あより
 名のりゆんと。源が
 のたすく。さまの

るされぬれをぬよせありとぬ。たぞう
 しいあらん。たが志のびてこそ。この縁ふこ
 ぬよ。いさなりけり。とすさだめて。いさ
 かなぐさめけ色さび。と思へるものこのら
 かなさけなくこむ。うはん色どとおめ
 る。急ひらちや術ならざりん。ゆるさ
 んといくちを。まよ。女ぬこのうらめを。やぎ
 て。つ。も。心も志らぬるも。らうた。とみ
 のよ。福なくぬけは。あいた。女ハま
 してさ海。よ思ひ乱建たるけ。まきなりな

源氏物語

花乃えん

七

中ぎれてききりし
 ○暇日れしきもは暇日
 の花宴よりおあし
 ろーとん○のあはれ
 云々みゆの膝月夜の
 云のさく物さよ右大
 玉の女さくまりのひ
 しが退知しるあらん
 と路のほほど良清、怪
 光をつのちてうの
 びせのまへ○の
 ぢむ中重の陣○
 ぢくれたちて思ふ
 さまの車○四位少
 右中弁二人共右大
 玉の公さよて御月夜
 の兄弟○けううい
 あらぬ○のまへて云
 五らのさく何せ

清き。怪光をつけてうあがりせのひけれを。あまへ
 よりまのてはひなるほどよ。たゞ今おのぢむよ
 りあられたちて侍りつる車どもままり物。はあ
 つかこのさく人侍りける中よ。四位少将。右中弁。
 るどりをさきりぞく。あかり侍りつるや。弘徽殿の
 退かぬあがれるんと。みひつ。けうういあらぬけを
 ひどもさくそて車三つを侍りつ。とまゆ
 よも。むねうちつぶぬのよ。いひまへていつま
 たらん。父おとどまて。とまゆ。うもてな
 されん。いひまへて。まへて。人のあはれよく見
 たらん。右中弁
 女を侍りし
 女
 女
 女

廿二号七

とも知りあし
 ○のまへて
 されん右大玉のさく
 ひて原を解し取らん
 なまありていと
 ○はれとを
 ふのまへてはれ
 俗シンソコをなまめ
 長歎息之原さくま
 思案して心底あら歎
 息してまへて
 一ノ才六節
 日ひるるれを日ひと
 二三日以上をいふ原
 二三日内裡も原の
 へはれ上ハ心屈して
 やあらんとん○の
 志の扇ハ先夜御
 月夜と取替の扇
 〇さくらのさく

さだめぬほど。さくらのさく。あまへ。さく
 てあらそあらん。さくらのさく。あまへ。さく
 せ。いひまへて。とまゆ。うもてな
 たらん。父おとどまて。とまゆ。うもてな
 されん。いひまへて。まへて。人のあはれよく見
 たらん。右中弁
 女を侍りし
 女
 女
 女

源氏物語

花乃えん

十

さね檜扇のお方のうへ三重つゝ振色の爲やうめて包みそ色々の糸よくとちたるとん面白裡蘇芳うすのト云○世よあらぬのあせよあらぬ世であらぬぬ之俗にけりあらぬさどいあそんさどいさけりあらぬちのまをがママあらぬの月のひまををきたのめよしてあれがとん○かきうけては源はあを扇よかき付てまのあそ

二小節一節

何のぬあそん「不足なそん○をこのゆをへあれは源のをしんあそを男されたるもまゝいんと之○うらめさけれ後めしつゝあらんドラのあ中のぎゝゝ日ひ内裡いあひしこの物後之○武蔵のとくちをうら源をつゝ慕ひのあそおまのまよもありぬは例のとい定○今はいとようされてまはあ上列のひで、無理よ源を慕ひのいぬとん

源氏物語

める月をかきそ。あようつゝたる心をめられ孫うららゆとお人のんつひえきそあらうあれどゆ急ちううめてあらたり。その原をたとひいさ海のこ。うろよわうり

二小節一節

何のぬあそん「不足なそん○をこのゆをへあれは源のをしんあそを男されたるもまゝいんと之○うらめさけれ後めしつゝあらんドラのあ中のぎゝゝ日ひ内裡いあひしこの物後之○武蔵のとくちをうら源をつゝ慕ひのあそおまのまよもありぬは例のとい定○今はいとようされてまはあ上列のひで、無理よ源を慕ひのいぬとん

花のえん

つれづれとさしゆの
是らばたらしうと思
しつゝ○判あふりて
まのほていふ發強
尋ひしりて○や
らうのほ馬樂貫
川よぬき川の流の
やいらたまらやハ
らうよぬる夜ハな
くておやさくつら
ハまゝていゝあり、け
僅る糸をうゝひの
あ、葵上のうちとけ
ぬをかちちのまゝ○
きやうざゝ詩文の
秀逸のよゝ○いちの
りの、上は文人樂人
そのまぢく○おま
るぬ左大玉みづら
しつゝ○いはよとく

つれづれとさしゆの
是らばたらしうと思
しつゝ○判あふりて
まのほていふ發強
尋ひしりて○や
らうのほ馬樂貫
川よぬき川の流の
やいらたまらやハ
らうよぬる夜ハな
くておやさくつら
ハまゝていゝあり、け
僅る糸をうゝひの
あ、葵上のうちとけ
ぬをかちちのまゝ○
きやうざゝ詩文の
秀逸のよゝ○いちの
りの、上は文人樂人
そのまぢく○おま
るぬ左大玉みづら
しつゝ○いはよとく

廿二号九

「あゝあゝよとちも」別
段よのまじりて舞ひし
まゝにさのゆゝとん○
判してさのゆゝとん
よまゝにさのゆゝとん
の舞出のいゝまゝのえ
たゝゝ代の面目なる
ど、とおほやけのあ
たよなりてのいゝと
○并中ねいづつしる
左大玉の公達左中
弁と改中ねとん、
三小の才一節

「あゝあゝよとちも」別
段よのまじりて舞ひし
まゝにさのゆゝとん○
判してさのゆゝとん
よまゝにさのゆゝとん
の舞出のいゝまゝのえ
たゝゝ代の面目なる
ど、とおほやけのあ
たよなりてのいゝと
○并中ねいづつしる
左大玉の公達左中
弁と改中ねとん、
三小の才一節

源氏物語

花乃えん

十二

二小段の才二節、源
弁中ねとちよ句欄

めてあまえ。○引月バ
 り。四月之四月に
 ら夫ハ朱雀院へ入内
 一のつてよまきだま
 ませあつて。さきま
 ○引月なる。俗ムシ
 ヤウニ之。○説きそのな
 くハあつて。いづれかの
 なまきハ確とせぬ。と
 御月ハ右大玉の女
 の中、と源氏推し
 へ。一向よおれぬ。い
 ハあらねど。○とい
 へ。ゆゑ。のらぬ。あ
 たりハ弘徽殿のあ
 と。中あ。けれ。ど
 さ。ら。よ。用。持。る。ま。と
 の。ま。え。○か。ら。ら
 へ。ん。関。係。せ。ん。も。え

よよりめてもの。言あをせて遊ひぬ。かきあへ。是近
 を二小段とす。は段も大い殿のこ。と。あ。つ。て。さ。く
 葵上も。なる。ほ。う。と。み。の。い。ど。も。は。父。左。大。玉。ど。の。ハ。源。を。め。で
 た。し。と。つ。ん。の。ふ。さ。ま。え。は。ふ。は。年。中。お。と。あ。る。を。并。の。中。お
 へ。と。い。く。洗。も。あ。れ。ど。新。秋。なる。の。説。の。め。く。二。人。なる。と。あ
 ま。ら。け。し。年。ハ。中。お。の。身。左。中。并。よ。て。若。は。ふ。の。巻。よ。お。山。へ。ま。お
 り。て。と。さ。ら。の。寺。の。よ。なる。や。と。さ。ら。ひ。人。なる。と。い。ひ。中。お
 ハ。中。お。え。師。云。は。あ。ハ。御。の。上。よ。も。ま。お。り。あ。ひ。で。と。い。ひ。ど。か
 い。か。よ。と。い。ひ。若。ら。へ。あ。む。せ。と。い。ひ。皆。人。の。と。さ。ら。い。あ。ら
 び。年。ハ。中。お。も。お。の。人。ハ。居。あ。る。せ。あ。る。を。さ。ら。ら。し。

あのあけのまへ。をあれある。後。代。お。ほ。し
 づ。い。と。もの。を。げ。し。う。な。が。め。娘。よ。ま。ま
 あり。う。月。を。う。り。と。お。ほ。し。さ。ご。め。あ。れ。を。い
 と。ら。り。な。う。お。ほ。し。み。ざ。れ。あ。る。を。を。と。こ
 へ。も。あ。づ。み。の。い。ん。よ。説。を。あ。る。く。ハ。あ。ら。ぬ

御月
源氏
朱雀院

廿二号十

○思ひまづらひ。俗
 シンパイ。○やよひ
 三月之。○例。の。け。ち
 け。ち。は。結。解。の。説。あ
 れ。ど。結。解。す。基。の
 け。ち。さ。ら。な。ど。い。ふ
 結。と。お。れ。ト。ま。よ。え
 弓。の。射。を。さ。め。の。式。

二三日月弓術ある
 と。き。は。を。解。り。の。目。外
 結。日。と。い。ふ。又。終。り。よ
 射。る。弓。の。手。を。け。ち
 を。射。る。と。い。ふ。○外
 の。ち。り。る。ん。古。今。よ
 別。る。ん。の。る。き。山。と
 の。橋。ふ。か。の。都。る。ん
 後。を。さ。ら。の。か。し。と。あ
 を。と。り。て。は。あ。よ。を
 へ。ら。れ。て。あ。そ。く
 嘆。た。る。よ。や。と。ん。○

ど。いづれともあらぬ。よ。よ。い。ぬ
 あ。ら。う。よ。わ。づ。ら。ん。人。こ。ろ。く。思。ひ。こ
 づ。ら。ひ。娘。よ。よ。や。よ。ひ。の。廿。余。日。右。の。大。殿
 の。ゆ。を。れ。け。ち。よ。上。達。す。み。こ。ご。ち。お。ほ。く
 つ。と。く。の。ひ。や。あ。そ。て。殿。の。ふ。の。え。ん。し。娘。よ
 ぶ。さ。の。り。い。る。よ。た。る。説。お。れ。ち。り。な。ん。と。や。を
 へ。ら。れ。た。を。ら。ん。お。く。れ。て。さ。く。は。く。ら。ふ。さ
 き。ぞ。い。と。お。の。し。ろ。き。あ。ら。う。は。く。き。の
 つ。る。殿。を。あ。づ。ち。れ。は。も。ぎ。の。目。さ。ら。ま。さ。し
 つ。ら。り。れ。し。り。を。解。ぐ。と。もの。し。あ。ま。よ。と

橋のふか
右大玉
山
橋二木

源氏物語

花乃えん

十三

まづちのほむきの四
 仏徽殿のほむきのあま
 著のとい、右大五家の
 て、是より前より
 さずをいつて○これ
 をれと俗リツパニ
 さすのい、やうよ
 てしあるハを敷を
 よふよりスーさま
 よ地もをいつて、

三少才二節
 此の四位少羽右大
 五のほむきの少羽○
 此がやどのれあし此
 ちハ右大五におどり
 てよめるあま、ほむ
 のふん、さハあまの
 後のふの眺あるやう
 よ原ははあまのたーと

のやうよ、たよま車わいあめ、のうもて
 なすねくを」三小段の身一節、右大五家の方
 よく、あまの宴の設けを、あまの
 一くあまのあま、あま、あま、あまの業
 花乃、あま、あま、あま、あま、あまの業
 実ハ、あま、あま、あま、あま、あまの業
 あま、あま、あま、あま、あま、あまの業
 ある口つき、あま、あま、あま、あまの業
 かい、あま、あま、あま、あま、あまの業
 源氏、あま、あま、あま、あま、あまの業
 ぢよ、あま、あま、あま、あま、あまの業
 う、あま、あま、あま、あま、あまの業
 少羽、あま、あま、あま、あま、あまの業
 在、あま、あま、あま、あま、あまの業

廿二号十一

の心、上、ハ、あまのい
 つ、あま、あま、あま、あまのい
 る、あま、あま、あま、あまのい
 よ、あま、あま、あま、あまのい
 あ、あま、あま、あま、あまのい
 マ、あま、あま、あま、あまのい
 不、あま、あま、あま、あまのい
 の、あま、あま、あま、あまのい
 此、あま、あま、あま、あまのい
 正、あま、あま、あま、あまのい
 と、あま、あま、あま、あまのい
 と、あま、あま、あま、あまのい
 ○、あま、あま、あま、あまのい
 西、あま、あま、あま、あまのい
 う、あま、あま、あま、あまのい
 内、あま、あま、あま、あまのい
 て、あま、あま、あま、あまのい
 や、あま、あま、あま、あまのい
 き、あま、あま、あま、あまのい
 一、あま、あま、あま、あまのい

源氏物語

あま、あま、あま、あまのい
 福、あま、あま、あま、あまのい
 り、あま、あま、あま、あまのい
 ま、あま、あま、あま、あまのい
 ひ、あま、あま、あま、あまのい
 中、あま、あま、あま、あまのい
 き、あま、あま、あま、あまのい
 よ、あま、あま、あま、あまのい
 を、あま、あま、あま、あまのい
 大、あま、あま、あま、あまのい
 れ、あま、あま、あま、あまのい
 なく、あま、あま、あま、あまのい

花のえん

十四

内務洲のさへ

三小才三節

さくらのからのかしのかに
 表白きさくらの綺裏
 蘇芳之〇志りり
 長くひきて「裾之高
 貴の人ほど長く引
 く例之〇あざれた
 るおほききりぎが
 志やれたる親王姿
 と之〇志のよほひ
 めけおされてはけふハ
 上のあふふのそえ
 とるやうよ源よ
 内入来あをたし
 のささうけての
 源のうつくしき姿
 よ充麗てし〇
 ゑは源の姿のえ
 らしめぬよとい

◎◎◎^唐さくらのからのきせけなほく。えびぞめ

の志^下さへね。志りいとたごのくひきてみ

な人をうく乃まぬをよ。あざれたるおほ

きまきこのなをゆめきたるよそ。り^{ウヤハ}

れりいとあまのほさゆげよりとことな

り。地^〇のよほひめけおされてな^{ナカラナカラ}

とごゆーよなん。あそびるどりとあそ

う。縁ひて。ねさき。あけゆくほどよ。源

氏のみさけりうゑひなやめさすはよ

るーのひて。まごれさし縁ひぬ

三小段の
才三節
廿二号十二

ひのあふて奥もさ
 おろとのさへ〇ま
 ぎれさちるひぬ源
 れのよまをさりして
 を席を立出のあへ

三小才四節

おん殿正殿也〇女
 一の志の菜きよ一品
 宮と号は〇女三の
 志葵きよ赤染とを
 志のうへんと〇お
 いらさるこのつまは
 産のふハ寝殿の屋
 のはまのうらめえ
 〇袖口などあうの
 をりお月まで踏音
 のけいだきぬとて
 ち簾の下より女房の
 きぬの袖をぬく今日
 らく袖口ゆした

源氏物語

源のそれ日のほ装束のさまをいひえさく源ハい

ゑひたる中ぬして。とく立出のゆハ。その鏡月をお

んとお月を心をなれなえ。さてけふよあざれたるおほぎ

みきさの。とあるを。花をよ。ほ章巻よ。志どけなまき大文を

が。いとめ。あつらふ志どけなまきんや。帯の袍。指貫

を著。裾を引。よのつひの事。直衣。裾をのく

と志どけなまきとハ。志どけなまきハ。志どけなまきを

まきさへ。さて紫るよ。皇子が。ハ。志どけなまきハ。志ど

るよ。志どけなまきハ。志どけなまきハ。志どけなまきを

よかまき。とて。志どけなまきハ。志どけなまきハ。志ど

子。志どけなまきハ。志どけなまきハ。志どけなまきを

花乃えん

十五

ハ志のふし... 事どるなり。なほく... かいま... 於てい... 。

花宴の巻終

廿二号十五

鈴木弘恭大人著述目録

参考 土佐日記讀本 全一册

久米幹文小杉温郎兩大人序あり此日記は各學校の教科書なれど其種類甚多くして語辭の相異あり煩雜の憂あるを鈴木大人飽ぬ事と思ひて諸書を校合し悉く訂正して本文を一定し異同を首書し文法を標註し小杉大人と計りて新説の圖を卷末に付したれば讀者一目瞭然と了解すべき珍書なり實に土佐日記中の金壁と云ふべし

参考 竹取物語讀本 全一册

小中村清矩久米幹文兩大人序あり此物語は各學校教科書なれど舊本どもは語辭の相異あり又衍文もあるを鈴木大人飽ぬ事と思ひて諸書を校合し悉く訂正して異同を首書し文法を標註し且つ黒川真頼大人の珍説をも所々加へたれば此物語の種類中よは此右よ出る良書は必ずなかるべし

源氏物語講義 全六十册追々出版 榊卷迄十一册刻成

黒川真頼大人関并序あり此物語は既し湖月抄初め先哲の説明も有れば此書は専ら文法の事を仔細に論し且本文と雖も湖月抄河海抄花鳥餘情其他新釋評釋玉小楠等漏れたる説は黒川大人の考へ及び自説を擧て容易に發明せらるべき新説を示されたれば實に古今未曾有の珍書と云ふべし苟も源氏物語を一見せん

と欲する諸君は此書若くは無かるべし

女子穎才集 全一册

跡見花蹊先生題辭あり此書は現今府下有名なる公私立女學校生徒の歌文を大人點刪して一卷とせられたるなり

女子日用文例 全二册

此書は女子日用文の不完全なるを憂ひて短簡の文數十篇を大人の作られしを多田親愛大人能筆を揮て書れたる書をなれば尋常小學上級若くは高等小學の女生徒には適當として作文を學び書を學ぶに一舉兩得の書なり

文部省 小日本歴史 全三册

文科大學教授内藤耻叟先生の序あり此書は大人が専ら小學校用を供せんとて文部省の布告に基き事實の錯誤を訂正し建國の体制世態の變遷外交の盛衰工藝の起原等を校考して旨と収録し所々圖畫を挿み神武天皇紀元々年より今上天皇明治二十年に至る二千餘年間の事を編輯したる良歴史なり則ち文部省の檢定済となりたる書なれば各公私立小學校にて教科書位式の圖の如きは銅板に鑲刻して挿入せたり

參考 十六夜日記讀本 全一冊

黒川真頼三田葆光飯田武郷三大人序あり此書は専ら學校教科の用ゝ爲んとて其種類を悉く校合し且つ先哲も未だ一目せざる冷泉家秘藏の原本をさへ參考すれば實は無比の珍書と云ふべし則ち原本より冷泉爲經卿の自筆の奥書を寫し取りて巻尾に付したり讀者熟覽して是れを試み給ふべし

女學校 源氏物語拔萃 初五冊 用讀本

紫式部女史の才筆として此物語の名文なる事は既に數百年間江湖の普く知る所なり今や文學の道長足の進歩を爲し各校に和文學科ありてまづ土佐十六夜の諸日記并に竹取物語徒然草等の書を採用すると雖も獨り此書を漏したるは甚口惜しき事なれど是他なしその冊數の鴻漢なると叙事の猥褻に渉る所多きを以て省きたる事なるを鈴木大人甚だ飽ぬことと思ひて其猥褻に渉る卷々を省き卷數を減して物せられたる拔萃なればその良書なる事は推て知り玉ふべし

徒然草講義

全六冊追々出版 第一号一冊刻成

本書は大人の各學校に於て講義せられたるを源氏物語講義の体裁に倣ひて門人の筆記せられたるなり

東京 大家 十四家集評論辨 全四冊春部 一冊刻成

本書は現今詠歌を以て有名なる大家十四名の大人此歌を海上胤平氏が評論して難ぜられたるを大人の辨駁せられたるなれば歌學に志ある人は一讀すべき珍書なり

文話 全一冊

河野敏鎌君題辭黒川真頼小中村清矩田中頼庸三大人の序あり此書は古事記出雲風土記祝詞宣命を始め諸日記物語等より一二段づつ抄録して本文の傍に眼目照應對句抑揚頓挫省筆等此簽を附し一目して文法を了解し易く示されたるを黒川小中村田中の諸大人等評語を下し賜ひたれば文章家の最も愛すべき珍書なり

文法口授 一名和文獨案内 全一冊

福羽美靜大人題辭小中村清矩大人評語あり此書は文章の口けより文を工夫すべき仕方文を練磨すべき方法其他作文に關係する事は悉く舉て終り雅文を俗文に譯し漢文を和文に譯す例を舉て懇々説かれたれば如何なる初學にても一讀して文境に入る事を得べし此書は發兌の初めより各公私立學校等の教科書或は參考書となりたり

明治二十一年十二月十五日印刷
全 年 全 月 十七日出版

定價金壹圓五錢

源氏拔萃

著者

鈴木弘恭

東京府士族

東京小石川區竹早町十三番地

東京府平民

印刷者 發行者

中外堂 柳河梅次郎

全 日本橋區本町二丁目十番地

